

紹介

カルロ・M・チボラ著 日野秀逸訳

『ペストと都市国家』

——ルネサンスの公衆衛生と医師——

本書は Carlo M. Cipolla, Public Health and the Medical Profession in the Renaissance, 1976 ——『ルネサンスの公衆衛生と医師』——の全訳である。チボラが、専門の経済史だけでなく社会史的領域も含めた幅広い研究に携わっていることは、『読み書きの社会史』『時計と文化』などの邦訳書のタイトルを見てもわかるが、本書によって彼は、社会史と医学史の接点とも言うべき公衆衛生と医療サービスに光を投じることになった。全体は二部からなり、第一部では主に十六・十七世紀北イタリアの公衆衛生施策が、第二部では当時のイタリアの医師の実態が、綿密な実証研究によって明らかにされる。近年、近代都市における公衆衛生や病いの問題に関心が向けられる中で、本書の訳出は時宜を得たものと言えよう。以下、順を追って内容を見てい

くことにする。

まず序論では、十三世紀から十七世紀の医学事情についての簡単な説明がなされる。大学の発展に伴う専門的医師集団の登場、ギルドや公衆衛生局による医業の規制が要領よくまとめられている。

第一部は『公衆衛生局の起源と発展』と題し、ペスト予防に活躍した衛生局と社会の関係を扱う。一三四七—一五一年の黒死病大流行を契機として、北イタリア都市国家には他のヨーロッパ諸国に先がけて公衆衛生局が設けられた。感染予防を主たる目的とするこの機関は、都市国家の行政官が当初から実権を握り、検役・防疫的交通遮断・汚染物の焼却・ペストに感染していないことを示す衛生通行証の発行などの活動を行った。時代が下るに従って衛生局の活動は厳格になり、活動範囲も緊急時の流行病伝染予防から平時の衛生状態改善へと広がっていく。十六世紀中頃までには、食品販売や住宅事情のような社会的・経済的要因にまで注意が払われるようになった。

しかし、設立以来絶対的権限を保證されてきた衛生局も、都市国家のひとつの行政機関である限り様々な障害とぶつかること

になる。読者はここに、衛生局を通して、当時の都市生活の一端を垣間見ることにしよう。第一の障害は、衛生施策を行うことに對する広範な敵意である。隔離や消毒を嫌う民衆、交通遮断や商品の検役に腹を立てる商人、聖職者は公開説教などの宗教的集会が禁止されることに憤慨し、衛生官はしばしば非難・中傷・肉体的暴力の的にされた。しかも商人が経済的被害を被ると、それはすぐさま労働者の雇用低下につながる。労働者は流行病より失業による飢えの方を恐れるという事態が生じる。かくして、失業者の反乱など考えたくない都市当局は、商人とある程度妥協せざるをえなくなったのであった。第二の障害は、衛生施策実行に伴い自国の経済的利益が損われることである。衛生局は、商人の投資水準を維持するための配慮を示したり、自国でペストが発生した場合には事態を矮小化して他国に伝えたりした（衛生局相互の病疫に関する情報交換は、十六世紀末までに合意が成立）。このように衛生局の活動は多くの妥協を強いられていたのである。しかしそれは、当時の衛生局の腐敗や道德的弱さのためではない。社会・経済・政治各方

面での障害に悩まされながらも、「十六・十七世紀のイタリア諸都市の衛生局は、非常に優れた、能率的な役所」だったのである。

最後に著者は、衛生局の行った施策の有効性について考察をすすめる。つまり衛生施策の適用に要する費用（それは莫大なものであった）に見合う便益があったかどうかということである。結論は、当時は病氣に対する正しい知識がなかったため「便益に比べて費用がはるかに高くならざるをえない」であった。

第二部『ガリレオ時代のトスカナ地方の医師』では、第一部の予防に対し治療の面が語られる。従来、「大学で教育を受けた内科医は、国王や教皇、指導的貴族と司教の医学的助言者であり」、「小さな町においてさえ、大学で教育を受けた内科医を見かけることはまれ」と言われてきた。しかし著者のデータは、北イタリアの状況が全くこの見解と一致しないことをみごとに証明している。一六三〇年のトスカナ大公国の医師調査によれば、全人口に対する医師の比率は一万人以上につき内科医二人外科医二人で非常に高く、しかも小さな村にさえ大学

で教育を受けた内科医が存在していた。これは、十三世紀からイタリア都市国家で一般になった公共医の存在に負うところが大きい。十六・十七世紀のイタリアでは市町村がその財力に応じて公共医を雇っていたが、このことが内科医の需要を高く保ち、また農村部に内科医をひきとめておくのに役立ったのであった。

さて、著者は第二部でも費用と便益の問題について考察する。十九世紀まで治療は医学の最も弱い点であった。それ故、育成するにもサービスを受けるにも多くの費用がかかる専門医師を沢山かかえていたルネサンス期北イタリアでは、またもや費用が便益より高かったことになる。しかし、たとえ医学的知識に大差がないとしてもニセ医者と専門医師をはっきり区別しておいたことは、ヨーロッパ全体として見れば十分メリットがあった。医療を行うには専門訓練が必要という構想が、近代の科学的医学興隆への道を開いたのである。

以上で、本書の内容を若干の取捨選択を交えて概観したわけだが、本書の価値は何よりも、一次史料に基づいて今まであまりふれられることのなかったルネサンス期イ

タリアの公衆衛生と医療サービスの実態を明らかにしたことであろう。チボラも本書の主眼は「中世後期から近世初頭の医学の歴史のまさしくもっとも独創的かつ興味深い一章」を物語ることだと述べている。しかし、探究心旺盛な読者は、それだけでは満足できないのではないだろうか。衛生局や公共医の成立発展と都市国家の構造の関係、衛生施策と都市経済の対立・都市民の反応など単なる事実の指摘で終わるには惜しい問題が随所に見られるからである。費用と便益の問題にしても、現代医学の立場から評価を下すだけでなく、当時の公権力のあり方や社会状況からめた考察を期待してしまうのは、『ベストと都市国家』という訳書のタイトルのせいだけでもなからう。

そうは言っても、本書が私たちに貴重な知見を与えてくれることにはかわりはない。特に都市空間や、医と社会の関係に興味を持つ人々にとっては、興味深い一冊であると思う。

(B6版 二二五頁 一九八八年四月
平凡社 二六〇〇円)

(高田京子 京都大学大学院生)